

地域戦略研究所紀要

第6号

支え合い・助け合いが大切だと思う市民像

坂本 毅啓 …… 47

北九州市「地域福祉に関する市民意識調査」の二次分析

北九州市立大学
地域戦略研究所
2021.3

支え合い・助け合いが大切だと思う市民像 北九州市「地域福祉に関する市民意識調査」の二次分析

坂本 毅啓

- I 研究の目的と背景
- II 分析に使用するデータ
- III 地域の交流とボランティア活動
- IV 地域福祉の充実に必要な力
- V 支え合いを重視する市民像
- VI おわりに

<要旨>

地域共生社会の実現という理念の実現のためには、支え合いに地域住民の参加が不可欠である。地域福祉の担い手として期待される支え合い・助け合いが大切だと思う市民像について行政調査の二次分析から明らかにした。年齢は若め、健康状態は良い。地域活動の活性化のためには人と団体をつなぐ支援、地縁団体の活性化、地域活動の意義を普及するためのイベント実施、情報へのアクセスのしやすさが大切だと考えている。

<キーワード> 地域福祉、地域共生社会、住民参画、共助、ボランティア

I 研究の背景と目的

1. 地域福祉理論の展開から地域共生社会論へ

2020年に、北九州市では「北九州市の地域福祉 2011～2020（地域福祉計画）」（以下「地域福祉計画 2011～2020」とする）の改訂を目的とした北九州市地域福祉計画策定懇話会が開催された。基となった「地域福祉計画 2011～2020」は2011年2月に策定され、2016年に中間フォローの実施のための「地域福祉計画推進懇話会」が設置され、翌2017年6月には「北九州市の地域福祉 2011～2020 中間見直しプラン」（以下「中間見直しプラン」）が出された。「中間見直しプラン」以降から北九州市の地域福祉計画の大きな柱となっているのが、地域共生社会の実現という理念である。今回の改訂でも「（仮称）北九州市の地域福祉 2021～2025」の素案を見る限り「子ども、高齢者、障害者を含め、すべての人が地域、暮らし、生きがいとともに創り、高め合うことができる「地域共生社会」の実現を目指します」とした上で、「地域の特性を生かした 地域共生のまちづくり」を基本理念として掲げられている。そして「この計画では、身近な地域のことを誰もが自分自身のこととして考え、地域の課題を地域の人々が主体となって解決できるよう、共に語り、共に考え、

共に支え合うことで、地域の特性を生かした地域共生のまちづくりを目指します。」と、地域住民のみならず公的機関や民間企業、行政機関などが共に支え合うことを掲げている¹⁾。

この地域共生社会の実現という理念については、既に日本の社会福祉業界（福祉臨床現場、学会、教育機関等）においては基本的な考え方として広まってきている。地域共生社会の実現という考え方について後藤は、政府が 2016 年に出した「ニッポン一億総活躍プラン」と「経済財政運営と改革の基本方針 2016～600兆円経済への道筋～」（骨太方針 2016）を受けて、地域力強化検討会「中間とりまとめ」、社会福祉法の改正、そして地域力強化検討会「最終とりまとめ」へと進む中で政策化が進んできたと指摘している〔後藤、2019：66〕。

それでは、この地域共生社会の実現を巡るいわば地域共生社会論は目新しいものなのであろうか。その点について二木は「『地域共生社会』が『パラダイムシフト』とまでは言えないと思います。なぜなら、『地域共生社会』に含まれる考えは、すでに 1970 年代から岡村重夫氏等の地域福祉研究者が先駆的に提唱していただけてだけでなく、厚生省（当時）自身が 1990 年の社会福祉事業法改正（いわゆる福祉八法改正）時に、（略）『基本理念』として入れていたからです。」と指摘している点は、地域福祉理論の流れを踏まえると極めて妥当な指摘であると言える〔二木、2017：83〕。

歴史的に捉えるとすれば、最初に地域福祉を学術的に論じたのは二木も指摘しているように岡村重夫である。岡村によれば地域福祉という概念が使われるようになった背景には「対象者のもつ地域社会関係その他の社会関係を保存し、発展させながら保護的社会福祉サービスを提供しなければならないという要求」があるからだとしている。この要求を「真実に解決するためには、単に在宅の対象者だけに注目するのではなく、対象者自身と同時に地域社会の構造そのものに着眼することが必要」だとしている〔岡村、2009：42〕。その上で地域福祉概念を構成する要素として「(1)最も直接的具体的援助活動としてのコミュニティ・ケア、(2)コミュニティ・ケアを可能にするための前提条件づくりとしての一般的な地域組織化活動と地域福祉組織化活動（前者は新しい地域社会構造としてのコミュニティづくりであり、後者はそれを基盤とする福祉活動の組織化である）、(3)予防的社会福祉」の 3 つを挙げている〔前掲書：62〕。さらにこの 3 要素の他に「地域福祉活動の対象者、とくにコミュニティ・ケアの要保護対象者の種類によって、地域福祉の各分野が成立すると考えられる」と述べた上で、「各分野にはいずれも『コミュニティ・ケア』『地域組織化』『予防的社会福祉』の要素をそなえなくてはならない」と指摘している〔前掲書：63〕。この「地域組織化」については、地域福祉活動を展開するにあたっては地域住民などが「共に支え合う」ことを重視した「地域共生社会論」と共通するものと考えられる事であり、まさしく二木が指摘した通りである。

1990 年代に牧里は、岡村以降の代表的な地域福祉研究として三浦文夫、永田幹夫、右田紀久恵、真田是、井岡勉を挙げている〔牧里、1993：505〕。それらの研究を踏まえて、牧里は地域福祉研究を構造的な概念モデルと機能的な概念モデルに分けて整理しているが、構造

的概念モデルの中の運動論的アプローチにあっても、そして機能論的概念モデルの中の主体論的アプローチにあっても、共通して住民参加の視点が含まれている[牧里、1993:504]。

この牧里の分類によれば構造的な概念モデルの制度政策論的アプローチに分類される三塚武男も「地域福祉というのは住民自治が要（かなめ）」とした上で、「暮らしに根ざした日常的なヨコの結びつきがあって、住民自治が中身のあるものになっていく」と指摘している[三塚、1997:34]。さらに「まちづくりのなかに福祉の視点を据える、そして福祉のなかに人権の視点を据え」た「福祉のまちづくり」が重要であるとも指摘している[40]。

改めて言うと、岡村に続く地域福祉学研究者が取り組んできた地域福祉理論の積み上げが、今日の地域共生社会論へとつながっている。そこに通底していることは、住み慣れた自宅で福祉サービスが利用できる「在宅福祉サービス」のみを視野に入れては不十分であり、地域社会構造としてのコミュニティづくりが必要だという点である。草平は、「地域社会において普遍性をもちづらいマイノリティとされる人々などに関して、社会福祉を必要とする者は、生活困難な当事者と同じ立場に立つ同調者や利害を代弁する代弁者や各種サービスを提供する機関・団体・施設とともに一般的コミュニティの下位集団としての『福祉コミュニティ』の形成を図る必要がある」と指摘している[草平、2007:1133]。地域共生社会論では、「支え手と受け手の垣根を越えた支え合い」として提起されており、当初は「我が事としてとらえる」ことによる地域住民の積極的な参加が求められている²⁾。つまり、地域福祉においては地域住民が地域の福祉問題に対して関心を持ち、ともに支え合いながら解決に取り組もうとする行動化が重要なのである。

2. 研究目的の設定

地域共生社会の実現、あるいは高齢者の介護領域を中心にした地域包括ケアシステムというネットワークの構築においては、地域住民の参加は重要な課題であることは先述した通りである。つまり、地域住民による支え合い抜きには考えられないのである。それでは、その地域での支え合いが大事だと考えている地域住民（地域での支え合いを重視する人）とは、どのような人物像なのであろうか。支え合いを重視する市民像を明らかにすることで、地域住民主体が主体となった地域福祉活動の実現可能性は高まるのではないだろうか。地域福祉を活性化するための担い手をどのようにして育成していくのか、そして活動者を支援していくのかを考える基礎資料となるのではないか。地域福祉の担い手を理解するアプローチの1つとして、本論では北九州市が実施した「地域福祉に関する市民意識調査」のデータを活用した二次分析を行い、地域での支え合い・助け合いを重視するのはどのような人物像なのかを明らかにすることを目的とする。

II 研究方法

1. 使用する調査データ

本研究で使用するデータは、新しい地域福祉計画を策定するための基礎資料として市民

が地域福祉に対してどのような意識やニーズを持っているのかを把握することを目的に、北九州市が2019年12月から2020年1月末に実施した「地域福祉計画に関する市民意識調査」（以下「市民意識調査」）の調査票データである。個人が特定されるような情報が削除された状態で、データ提供の協力を得た。調査方法は郵送配布・料金受取人払による郵送回収で、調査対象者は北九州市に住民登録されている20歳以上の者から無作為抽出された6,000名である³⁾。母集団とサンプルサイズについては表1に示したとおりである。

二次分析を行うにあたっては、IBM社のSPSS Statistics 27、Microsoft社のExcel for Microsoft 365、アイスタット社のExcel マルチ多変量(Ver.1.1)を使用した。集計及び多変量解析を実施するにあたっては、母集団の年齢及び性別の構成に基づいてケースの重み付け（ウェイトバック法）を行い、サンプル補正を実施した（表1）。なお、住んでいる区の人口比に基づいたサンプル補正は行っていない。

表1 母集団とサンプルサイズおよびサンプル補正

年齢	母集団				標本抽出				回答者			
	男	女	合計	構成比	男	女	合計	構成比	男	女	合計	構成比
20～24歳	24269	22597	46866	5.94%	169	187	356	5.93%	17	35	52	2.93%
25～29歳	22769	21492	44261	5.61%	184	183	367	6.12%	29	37	66	3.72%
30～34歳	24569	23942	48511	6.15%	180	175	355	5.92%	27	51	78	4.39%
35～39歳	27491	27320	54811	6.95%	204	200	404	6.73%	34	64	98	5.52%
40～44歳	31644	31758	63402	8.04%	224	255	479	7.98%	48	78	126	7.10%
45～49歳	33827	34807	68634	8.70%	264	274	538	8.97%	55	91	146	8.23%
50～54歳	28289	30470	58759	7.45%	213	241	454	7.57%	56	84	140	7.89%
55～59歳	27042	28933	55975	7.10%	214	222	436	7.27%	58	94	152	8.56%
60～64歳	28033	29569	57602	7.31%	218	188	406	6.77%	76	70	146	8.23%
65～69歳	34522	38612	73134	9.28%	223	303	526	8.77%	84	120	204	11.49%
70～74歳	29723	36655	66378	8.42%	240	296	536	8.93%	84	124	208	11.72%
75歳以上	55298	94857	150155	19.04%	416	727	1143	19.05%	159	200	359	20.23%
合計	367476	421012	788488	100.00%	2749	3251	6000	100.00%	727	1048	1775	100.00%

年齢	ウェイト値※1		最小値による補正※2	
	男	女	男	女
20～24歳	9.94117647	5.34285714	4.20932697	2.26229086
25～29歳	6.34482759	4.94594595	2.68654862	2.09422936
30～34歳	6.66666667	3.43137255	2.82282282	1.45292351
35～39歳	6	3.125	2.54054054	1.3231982
40～44歳	4.66666667	3.26923077	1.97597598	1.38426888
45～49歳	4.8	3.01098901	2.03243243	1.27492327
50～54歳	3.80357143	2.86904762	1.61052124	1.21482196
55～59歳	3.68965517	2.36170213	1.56228642	1
60～64歳	2.86842105	2.68571429	1.21455666	1.13719434
65～69歳	2.6547619	2.525	1.12408837	1.06914414
70～74歳	2.85714286	2.38709677	1.20978121	1.01075269
75歳以上	2.6163522	3.635	1.10782481	1.53914414
合計	3.78129298	3.10209924	1.60108802	1.31350148

注

※1……ウェイト値＝標本抽出数÷回答者

例：20～24歳・男性 → 169÷17＝9.9411765

実際には小数点第14位まで使用

※2……補正＝ウェイト値÷ウェイト値の最小値（55～59歳女性）

使用する全ての変数について正規性の検定を行ったところ、いずれの変数も正規分布しているとは言えない ($P<0.05$) という結果が出た。従って、特に断りが無い限りカテゴリ変数（順序、名義）として各変数を取り扱った。

本研究を行うにあたって、「市民意識調査」データの取り扱い等は日本社会福祉学会研究倫理指針及び「北九州市立大学における人を対象とする研究に関するガイドライン」に則った。

2. サンプルの属性

基本属性は年齢（5歳区分による12件法）、性別（男女による2件法）、住んでいる区（市内7区をカテゴリとした7件法）について、表2で示した通りである。

居住環境（5件法）、現居住環境の居住年数（「1年未満」、「1～4年」、「5～9年」、「10年以上」の4件法）、家族構成（世帯類型による5件法）については、表3で示した通りである。一戸建てに居住している人が多く（補正後57.5%、以下同じ）、居住年数は10年以上が最も多く（64.9%）、家族構成では核家族世帯が最も多かった（47.5%）。

表2 回答者の属性（年齢・性別・居住区）

属性項目	サンプル		サンプル補正後		
	度数	有効%	度数	有効%	
サンプル合計	1775	100	2541	100	
年齢	20～24歳	52	2.9	151	5.9
	25～29歳	66	3.7	155	6.1
	30～34歳	78	4.4	150	5.9
	35～39歳	98	5.5	171	6.7
	40～44歳	126	7.1	203	8.0
	45～49歳	146	8.2	228	9.0
	50～54歳	140	7.9	192	7.6
	55～59歳	152	8.6	185	7.3
	60～64歳	146	8.2	172	6.8
	65～69歳	204	11.5	223	8.8
	70～74歳	208	11.7	227	8.9
	75歳以上	359	20.2	484	19.1
性別	男性	727	41	1164	45.8
	女性	1048	59	1377	54.2
住んでいる区	門司区	183	10.3	262	10.3
	小倉北区	309	17.4	440	17.4
	小倉南区	366	20.7	530	20.9
	若松区	180	10.2	253	10.0
	八幡東区	141	8	201	7.9
	八幡西区	490	27.7	702	27.7
	戸畑区	103	5.8	145	5.7
	合計	1772	100	2532	100.0
	その他（欠損値）	3		9	

表 3 回答者の属性（住環境、家族構成）

属性項目	サンプル		サンプル補正後		
	度数	有効%	度数	有効%	
サンプル合計	1775	100	2541	100	
住居	一戸建て	1055	59.4	1461	57.5
	アパートやマンションなどの共同住宅	680	38.3	1007	39.6
	勤め先の寮や借り上げ住宅	30	1.7	59	2.3
	入所施設やグループホームなど見守りや介護が提供されている場所	10	0.6	14	0.5
居住年数	1年未満	63	3.5	103	4.0
	1～4年	243	13.7	427	16.8
	5～9年	240	13.5	362	14.2
	10年以上	1229	69.2	1649	64.9
家族構成	ひとり暮らし世帯	256	14.4	371	14.6
	夫婦のみの世帯	607	34.2	779	30.7
	核家族世帯	789	44.5	1208	47.5
	三世帯世帯	72	4.1	114	4.5
	その他の世帯	51	2.9	68	2.7

就労形態は表 4 に示したようにフルタイム、短時間勤務、自営業、学生、家事と分けた上で、さらにフルタイムは「主として日中に勤務」、「主として夜間に勤務、あるいは交代勤務がある」、家事は「介護や未就学児の育児を伴う」と「介護や未就学児の育児を伴わない」に分けており、これに「上記のいずれにも該当しない」を加えた 8 件法である。「フルタイム（主として日中に勤務）」が最も多く（34.4%）、次いで「上記のいずれにも該当しない」が 24.0%、「短時間勤務（パート、アルバイト、臨

表 4 回答者の属性（就労形態）

属性項目	サンプル		サンプル補正後		
	度数	有効%	度数	有効%	
サンプル合計	1775	100	2541	100	
就労形態	フルタイム（主として日中に勤務）	534	30.1	873	34.4
	フルタイム（主として夜間に勤務、あるいは交代制勤務がある）	81	4.6	147	5.8
	短時間勤務（パート、アルバイト、臨時雇用など）	270	15.2	347	13.6
	自営業	105	5.9	141	5.5
	学生（学業が本分の場合、アルバイトをしてもこちらに該当）	27	1.5	80	3.2
	家事（介護や未就学児の育児を伴う）	65	3.7	86	3.4
	家事（介護や未就学児の育児を伴わない）	211	11.9	257	10.1
	上記のいずれにも該当しない	482	27.2	610	24.0

時雇用など)」が 13.6%、「家事（介護や未就学児の育児を伴わない）」が 10.1%と続いている。

Ⅲ 地域の交流とボランティア活動

1. 近所との交流

近所の人と行っている交流は、「あいさつを交わす」が最も多く（98.9%）、次いで「立ち話をする」（54.5%）、「相談事があったとき、相談したり相談されたりする」（15.3%）と続いている。多くの人にとって近所との交流は挨拶や立ち話をする程度、つまり軽めの交流であると言える。

近所の交流でも挙げた「立ち話」も含めて、普段の人との会話・世間話の頻度については、「毎日」が最も多く（58.9%）、次いで「2～3日に1回」（16.5%）となっている。

一方で「ほとんどない」が 6.9%、

1ヶ月に1回が4%と、合計 10.9%の人が人との会話や世間話が無いあるいは乏しい状態にあると言える。

2. 地域の支え合い

地域の支え合いに対する考え（表7）については、「地域における支え合いは必要であり、今後も充実させるべきだと思う」が最も多く（48.3%）、次いで

「現在の自分には必要がないが、大切なことだと思う」（40.6%）が続いている。いずれも地域の支え合いは必要であると判断している選択肢であると考えた場合、9割近くの人が「支え合いが必要である」と解答したことになる。

表 5 近所との交流（複数回答）

		度数	%
複数回答	あいさつを交わす	2375	98.8%
	立ち話をする	1311	54.5%
	物をあげたりもらったりする	1010	42.0%
	相談事があったとき、相談したり、相談されたりする	367	15.3%
	一緒にお茶や食事をする	263	11.0%
	病気や急用のときに手伝ったり、手伝ったりしてもらったりする	198	8.2%
	家事やちょっとした用事をしたり、してもらったりする	175	7.3%
	趣味をともにする	150	6.2%
母数（有効数のみ）		2405	100.0%

表 6 普段の人との会話・世間話

		度数	%	有効%	累積%
有効	毎日	1485	58.4	58.9	58.9
	2～3日に1回	415	16.3	16.5	75.3
	4～7日に1回	266	10.5	10.5	85.9
	2週間に1回	79	3.1	3.1	89
	1か月に1回	102	4	4	93.1
	ほとんど話をしない	175	6.9	6.9	100
	合計	2522	99.3	100	
欠損値	0	19	0.7		
合計		2541	100		

表 7 地域の支え合いへの考え

		度数	%	有効%	累積%
有効	地域における支えあいは必要であり、今後も充実させるべきだと思う	1149	45.2	48.3	48.3
	現在の自分には必要ないが、大切なことだと思う	967	38.1	40.6	89
	行政が対応できない課題はボランティアやNPOに任せたいと思う	66	2.6	2.8	91.7
	地域の支えあいに頼らずに、公的な福祉サービスで対応すべきと思う	197	7.7	8.3	100
	合計	2379	93.6	100	
欠損値	0	115	4.5		
	その他	47	1.9		
	合計	162	6.4		
合計		2541	100		

表 8 地域での支え合い

地域での支えあい	やってみたい(a)		してほしい(b)		横軸差(a-b)	
	度数	%	度数	%	度数	%
一緒に外出する	383	15.1%	208	8.2%	175	6.9%
物品を貸したりあげたりする	433	17.0%	286	11.3%	147	5.8%
ゴミ出し、買い物など、家の外の家事援助	446	17.6%	301	11.8%	145	5.7%
日常生活における見守りや安否確認	740	29.1%	658	25.9%	82	3.2%
色々な情報を伝える	653	25.7%	592	23.3%	61	2.4%
草むしりや植木の手入れ	462	18.2%	423	16.6%	39	1.5%
電球の交換や住まいの小修繕	377	14.8%	343	13.5%	34	1.3%
炊事、洗濯、掃除など、家の中の家事援助	303	11.9%	287	11.3%	16	0.6%
その他	28	1.1%	40	1.6%	-12	-0.5%
悩みごとや心配ごとの相談	430	16.9%	445	17.5%	-15	-0.6%
用事があるときに家族の預かり・見守りをする	337	13.3%	369	14.5%	-32	-1.3%
留守になる家屋の留守番・見守り	383	15.1%	426	16.8%	-43	-1.7%
看病や介護をする	208	8.2%	327	12.9%	-119	-4.7%
災害時の安否確認や避難介助	753	29.6%	934	36.8%	-181	-7.1%

N=2541

それでは、回答者が考える地域での支え合いとはどのようなものなのか。地域での支え合いについて「やってみたい（やっている）」と「してほしい（してもらっている）」に分けた複数回答を集計したものが表8である。横軸差を求めて、「やってみたい（やっている）」という回答の方が最も多かった項目から並べている。「一緒に外出する」、「物品を貸したりあげたりする」、「ゴミ出し、買い物など、家の外の家事援助」等の3項目が、特に「やってみたい（やっている）」という回答の方が多かった。一方で「看病や介護を

する」、「災害時の安否確認や避難介助」の項目では、特に「してほしい（してもらっている）」回答の方が多かった。

この表8の結果を踏まえて、さらに、多変量解析の1つであるコレスポンデンス分析を行った。その結果が表9と図1である。 χ^2 乗検定の結果（ $p=0.000$ ）から、コレスポンデンス分析の結果には有意性が認められた。コレスポンデンス分析では2軸を求めるのが通常であるが、今回は変数の関係から1軸のみの結果となった。「やってみたい（やっている）」と「してほしい（してもらっている）」の2点間距離の半分を閾値として、地域の支え合いの各項目を「やってみたい（やっている）」と

「してほしい（してもらっている）」のどちらに含まれるかを分類した。図1に示したように、表8と同じような分類結果となった。

以上の結果を踏まえると、日常の身の回りの簡易な支え合いについては「やってみたい（やっている）」という意見が多く、一方で介護や災害時の避難介助といった福祉的専門性が求められるような支え合いについては、要望に対して担い手が不足している状態（過剰ニーズ）であると言える。

表 9 地域での支え合い（コレスポンデンス分析結果）

分析精度

統計量	1軸	計
固有値	0.014	0.014
単相関係数	0.119	
各軸の説明度	100.0%	100.0%

カイニ乗検定

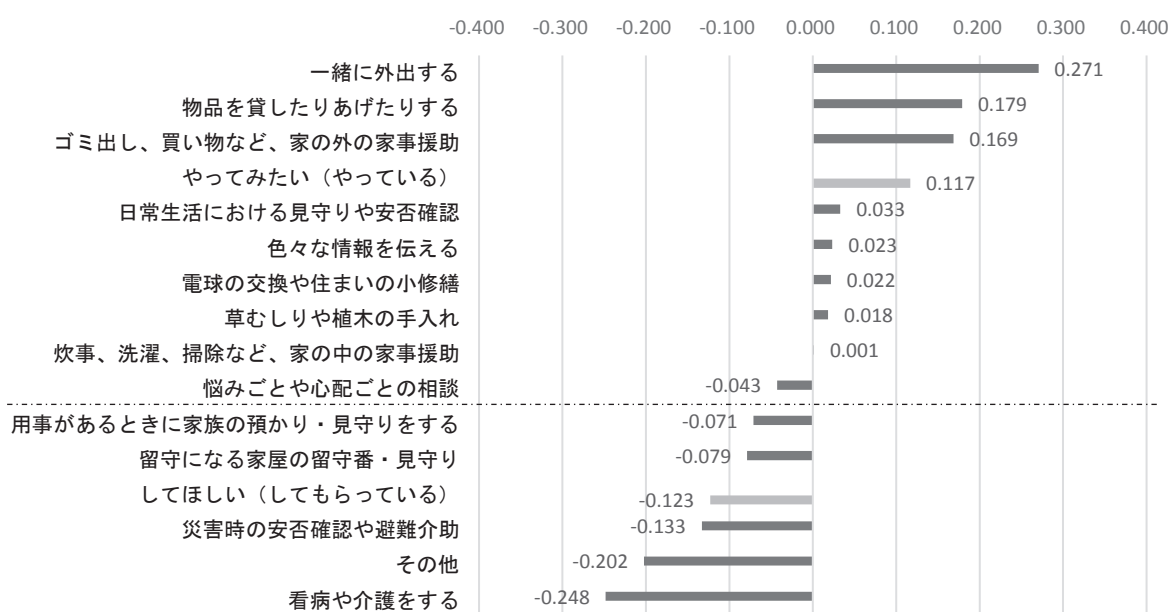
	1軸
統計量	164.3329
自由度	12
p値	0.000
判定	[**]

カテゴリースコア

	1軸
日常生活における見守りや安否確認	0.031813
悩みごとや心配ごとの相談	-0.04401
炊事、洗濯、掃除など、家中の家事援助	0.000266
ゴミ出し、買い物など、家外の家事援助	0.167317
電球の交換や住まいの小修繕	0.020376
草むしりや植木の手入れ	0.017221
一緒に外出する	0.269352
用事があるときに家族の預かり・見守りをする	-0.07221
看病や介護をする	-0.24937
色々な情報を伝える	0.022151
物品を貸したりあげたりする	0.177661
留守になる家屋の留守番・見守り	-0.08003
災害時の安否確認や避難介助	-0.13419

	1軸
やってみたい	0.115962
してほしい	-0.12236

図 1 地域での支え合い（コレスポネンズ分析結果）



3. 困っている相手への手助け

表 10 困っている相手への手助け

困りごと	助けると思う相手								横軸計 度数
	家族・親族		友人・知人		近所の人		職場の人		
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	
災害時の安否確認や避難介助	1952	76.8%	1395	54.9%	1243	48.9%	767	30.2%	5357
日頃のちょっとしたことの手助け	1885	74.2%	1434	56.4%	1083	42.6%	800	31.5%	5202
愚痴を聞くこと	1713	67.4%	1616	63.6%	600	23.6%	922	36.3%	4851
喜びや悲しみを分かち合うこと	1899	74.7%	1403	55.2%	447	17.6%	604	23.8%	4353
重要な事からの相談	1856	73.0%	1050	41.3%	184	7.2%	418	16.5%	3508
子どもの世話や看病	1812	71.3%	773	30.4%	280	11.0%	175	6.9%	3040
子ども以外の介護や看病	1608	63.3%	390	15.3%	142	5.6%	59	2.3%	2199
いざという時のお金の援助	1719	67.7%	238	9.4%	22	0.9%	39	1.5%	2018

N=2541

次に、困っている内容について、それぞれどの相手であれば手助けをすると思うかを尋ねた質問項目について集計した結果が表 10 である。表 10 では横軸計を求め、その度数が最も多かったものから降順で並べている。困りごとで横軸計が最も多かった項目は「災害時の安否確認や避難介助」であった。逆に最も少なかったのは「いざという時のお金の援助」であった。

この表 10 の集計結果を基にしてコレスポネンズ分析を行った結果が表 11 の集計結果である。χ² 二乗検定の結果から P 値は 0.000 であり、結果に有意性があると判断した。「家

族・親族」などの相手に関する項目のカテゴリースコアを基に、4点間のユークリッド距離を求め、その平均値の半分の値を境界値として、その境界値内にある困りごとの各項目を「家族・親族」などの各項目へと分類していった。その結果を示したのが図2である。

表 11 困っている相手への手助けのレスポンス分析

分析精度

統計量	1軸	2軸	計
固有値	0.100	0.020	0.120
単相関係数	0.317	0.140	
各軸の説明度	82.5%	16.2%	98.7%

カイ二乗検定

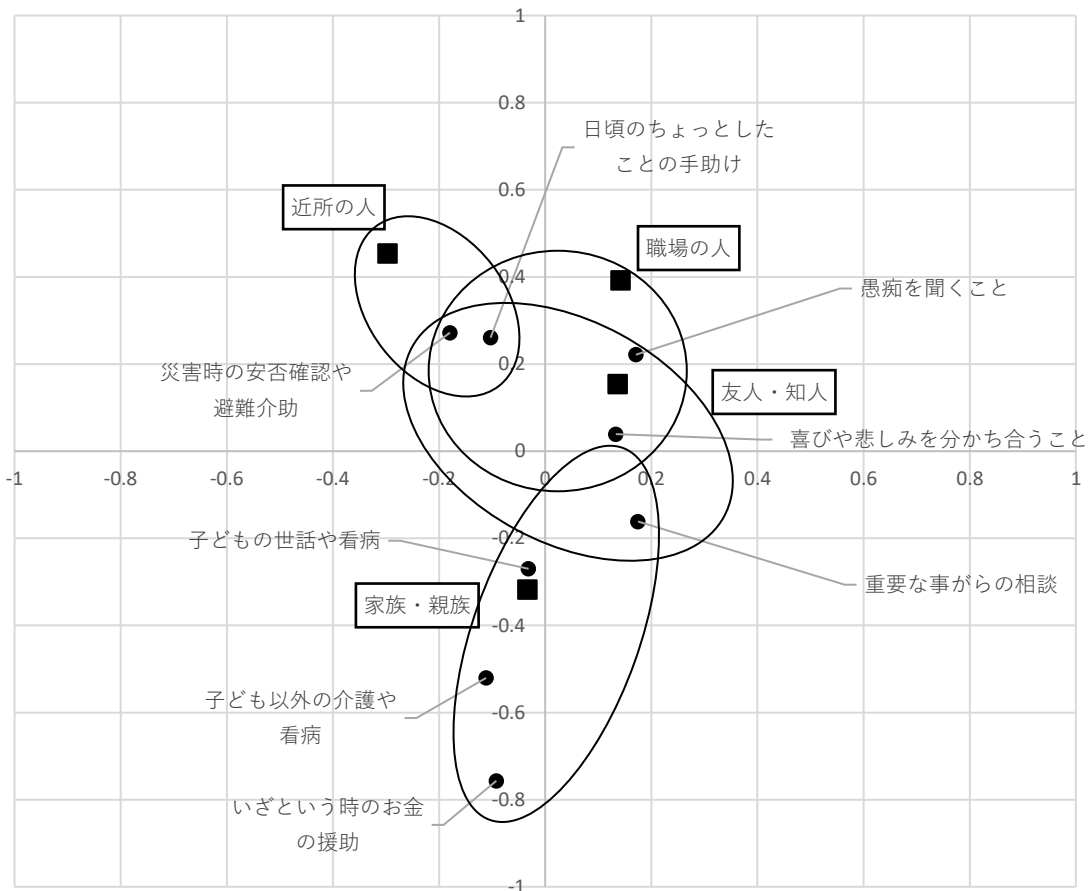
	1軸	2軸
統計量	3221.85127	607.192667
自由度	9	7
p値	0.000	0.000
判定	[**]	[**]

カテゴリースコア

	1軸	2軸
子どもの世話や看病	-0.2699467	-0.031283
子ども以外の介護や看病	-0.5205035	-0.1113811
重要な事からの相談	-0.1613874	0.17498693
愚痴を聞くこと	0.22153505	0.1709949
喜びや悲しみを分かち合うこと	0.03920451	0.13305299
いざという時のお金の援助	-0.7565941	-0.0920334
日頃のちょっとしたことの手助け	0.26051552	-0.1028976
災害時の安否確認や避難介助	0.27210264	-0.1794859

	1軸	2軸
家族・親族	-0.3171863	-0.0335205
友人・知人	0.15417485	0.13674708
近所の人	0.45403293	-0.2971704
職場の人	0.39253606	0.14225281

図 2 困っている相手への手助け



コレスポネンダンス分析の結果からは、「近所の人」では「災害時の安否確認や避難介助」、「日頃のちょっとした手助け」といった手助けが分類された。次に「職場の人」では「日頃のちょっとしたことの手助け」、「災害時の安否確認や避難介助」、「愚痴を聞くこと」、「喜びや悲しみを分かち合うこと」などが分類された。「友人・知人」では「愚痴を聞くこと」、「日頃のちょっとしたことの手助け」、「災害時の安否確認や避難介助」、「重要な事からの相談」等が分離された。「家族・親族」では「重要な事からの相談」、「子供の世話や看病」、「子供以外の看病や介護」、「いざというときの金の援助」等が分離された。以上の結果踏まえて考えると、家族や親族などの身近な存在であれば深刻で重たい困り事であっても手助けをする。一方で友人・知人や職場の人、あるいは近所の人といった存在は、ちょっとした手助けや喜びの分かち合い相談事などであれば手助けすると考えられている。つまり家族や親族に対しては、経済的問題や介護等の生活上の困難などの場合は手助けできる。しかし、家族や親族以外に対しては、そのような生活上の困難については手助けしにくいと考えていると言える。困っている人がいたとしても、その人が自己とどのような関係性があるのかによって手助けをするかどうかが変わってくると言える。

4. ボランティア活動への支障

表 12 ボランティア活動における支障（始めるとき・続けること）

ボランティア活動における支障	始めるときの支障		続けることの支障		横軸差	
	度数	%	度数	%	度数	%
情報を入手したり交換したりする機会がない	1161	45.7%	327	12.9%	834	32.8%
一緒に活動する仲間がいない	1185	46.6%	475	18.7%	710	27.9%
興味・関心がもてない	1116	43.9%	434	17.1%	682	26.8%
人付き合いが苦手、またはわずらわしい	1211	47.7%	552	21.7%	659	25.9%
活動のために資格や研修が必要となる	981	38.6%	350	13.8%	631	24.8%
家族環境（結婚、出産、介護など）	865	34.0%	771	30.3%	94	3.7%
経済的な余裕がない	1040	40.9%	997	39.2%	43	1.7%
健康や体力面で余裕がない	1072	42.2%	1034	40.7%	38	1.5%
時間的な余裕がない	1258	49.5%	1222	48.1%	36	1.4%
その他	21	0.8%	21	0.8%	0	0.0%
ボランティア活動中のトラブル	408	16.1%	1073	42.2%	-665	-26.2%

N=2541

ボランティア活動における「始めるときの支障」と「続けることの支障」の2つについて、各項目の複数回答の集計結果が表 12 である。その結果の横軸差を求め、差の降順で並べた。「始めるときの支障」として最も多く挙げられたのは「人付き合いが苦手、またはわずらわしい」（47.7%）、次いで「一緒に活動する仲間がいない」（46.6%）、「情報を入手したり交換したりする機会がない」（45.7%）が上位であった。それに対して「続けることの支障」では「時間的な余裕がない」（48.1%）、「ボランティア活動中のトラブル」（42.2%）、「健康や体力面で余裕がない」（40.7%）上位であった。この集計結果をもとにコレスポネンデンス分析を行ったところ、 χ^2 二乗検定でP値は 0.000 であり、この分析結果には意味があると判断した（表 13）。

この変数においてもコレスポネンデンス分析の結果では1軸のみの出力結果であった。「始める時の支障」と「続けることの支障」のカテゴリースコアによる2点間距離の半分を境界値として、ボランティア活動における支障の各項目を2つに分類した。その結果を示したのが図 3 である。「始めるときの支障」としては「情報を入手したり交換したりする機会がない」、「活動のために参加や研修が必要となる」、「興味関心が持てない」、「一緒に活動する仲間がいない」、「人付き合いが苦手、またはわずらわしい」が分類された。それに対して「続けることの支障」としては「ボランティア活動中のトラブル」、「時間的な余裕がない」、「健康や体力面で余裕がない」、「経済的な余裕がない」といった様々な余裕がなくなることが「続けることの支障」になると思われていると言える。

表 13 ボランティア活動における支障（コレスポンデンス分析結果）

分析精度

統計量	1軸	計
固有値	0.082	0.082
単相関係数	0.286	
各軸の説明度	100.0%	100.0%

カイニ乗検定

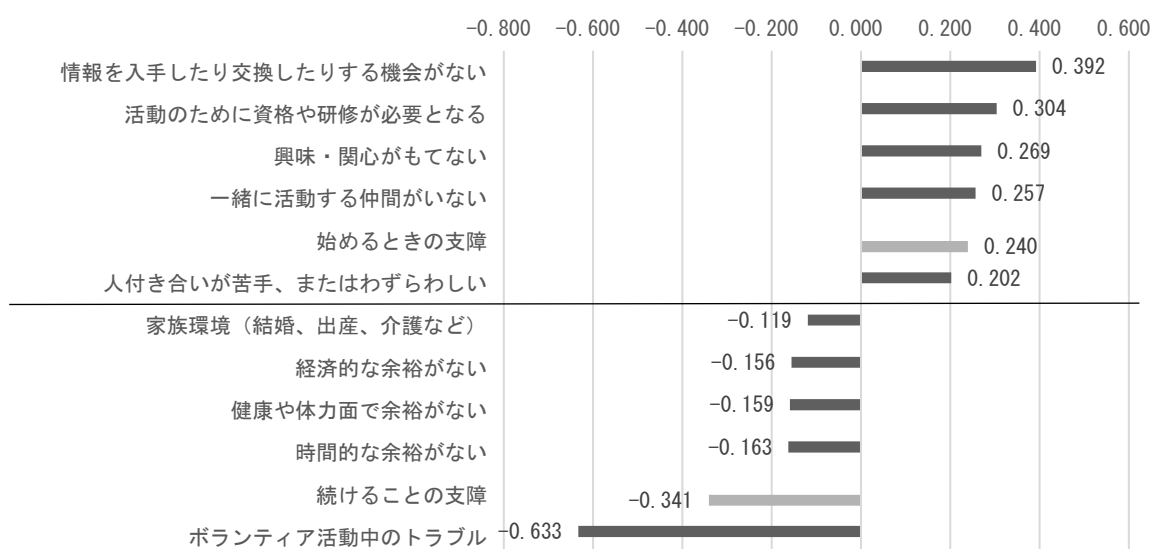
	1軸
統計量	1492.968
自由度	9
p値	0.000
判定	[**]

カテゴリースコア

	1軸
興味・関心がもてない	0.26949
時間的な余裕がない	-0.16264
経済的な余裕がない	-0.15594
健康や体力面で余裕がない	-0.15905
一緒に活動する仲間がいない	0.257009
情報を入手したり交換したりする機会がない	0.391855
人付き合いが苦手、またはわずらわしい	0.202251
家族環境（結婚、出産、介護など）	-0.11902
活動のために資格や研修が必要となる	0.304102
ボランティア活動中のトラブル	-0.63341

	1軸
始めるときの支障	0.239536
続けることの支障	-0.34091

図 3 ボランティア活動における支障（始めるとき・続けること）



IV 地域福祉の充実に必要な力

1. 3つの力の順位付け

表 14 地域福祉の充実に必要だと思う力

大切だと思う力	平均値※	度数	欠損値	標準偏差	グループ化中央値
個人の心がけや家族による、支えあい・助け合い	1.51	2489	52	0.712	1.44
地域で暮らす人やボランティア・地域活動を行う人たち、様々な施設・事業所などによる、お互い様の気持ちによる支えあい・助け合い	2.49	2478	62	0.651	2.53
社会保険制度や行政機関によるサービスや支援	1.99	2481	60	0.771	1.98

※ダミー変数（1位…1、2位…2、3位…3）による平均値。

Kruskal Wallis 検定

順位

三つの力	度数	平均ランク
個人の心がけや家族による、支えあい・助け合い	2441	2478.39
地域で暮らす人やボランティア・地域活動を行う人たち、様々な施設・事業所などによる、お互い様の気持ちによる支えあい・助け合い	2430	4838.99
社会保険制度や行政機関によるサービスや支援	2432	3643.95
合計	7303	

検定統計量a,b

	順位
Kruskal-Wallis の H(K)	1717.49
自由度	2
漸近有意確率	0.000

a Kruskal Wallis 検定

b グループ化変数: 三つの力

ここまでは調査結果の概要全体を捉えながら、ボランティアや地域の支え合いについて市民はどのような意識を持っているのかをその全体像を捉えてきた。ここからは地域福祉の充実に必要な力だと思うのかという変数に注目し、地域福祉の充実に何が必要だと思われるのかを見ていくことにする。

表 14 は「住民ができるだけ地域のなかで生活できるようにしていくためには、何の力が大切だと思うか」（以下「3つの力」という質問の集計結果である。項目は「個人による心がけや家族による、支え合い・助け合い（自分のことを自分でする、家族に助けてもらうなど）」（以下「自助）」、「地域で暮らす人やボランティア・地域活動を行う人たち、様々な施設・事業所などによるお互い様の気持ちによる支え合い・助け合い」（以下「互助・共

助)、そして「社会保険制度や行政機関によるサービスや支援」(以下「公助」)の3つである。これら3つの力について調査では1~3位の順位づけを回答する形式となっている。その順位をそのまま変数とし、その平均値を求め、3つの力の順位結果が表14である。なお平均値の比較差において、この変数が正規分布しているとは言えないため Kruskal Wallis 検定を用い、有意確率 0.000 であったため、この平均値の差には意味があると判断した。その結果、1位は自助、2位は公助、3位は互助・共助であった。つまり地域福祉において学術的に重視されている地域の支え合いは最も低い順位であると思われるのである。むしろ住民が地域で生活を続けていくためには自助が最も重要であると考えられていると言える。

2. それぞれの力を重視する人の平均年齢の比較

表 15 地域福祉に大切だと思う力の各平均年齢
(ノンパラメトリック検定結果)

地域福祉に大切だと思う力	年齢			
	平均値	度数	標準偏差	グループ化 中央値
自助	7.6	1522	3.482	7.79
互助・共助	6.61	213	3.679	6.4
公助	7.12	747	3.651	7.35
合計	7.37	2482	3.563	7.51

Kruskal Wallis 検定
順位

地域福祉に大切だと思う力	年齢	
	度数	平均ランク
自助	1499	1263.76
互助・共助	205	1069.85
公助	731	1165.7
合計	2435	

検定統計量 a, b

	年齢
Kruskal-Wallis の H(K)	19.778
自由度	2
漸近有意確率	0.000

a Kruskal Wallis 検定

b グループ化変数: 問7 第1位にした地域福祉に大切だと思う力

表 16 年齢の
ダミー変数

年齢	ダミー変数
20~24歳	1
25~29歳	2
30~34歳	3
35~39歳	4
40~44歳	5
45~49歳	6
50~54歳	7
55~59歳	8
60~64歳	9
65~69歳	10
70~74歳	11
75歳以上	12

3つの力をそれぞれ大切だと思っている市民とはどのような人たちなのかを捉えることを目的に、3つの力の第1位と回答したケースの平均年齢を見てみることにした。その結果表15である。年齢に関する変数も正規分布しているとは言えないため、ノンパラメトリック検定として Kruskal Wallis 検定を用いた結果、有意確率は 0.000 であったため年

年齢の平均値の差には有意性があると判断した。年齢階層に対応したダミー変数については表 16 の通りである。その結果、互助・共助を重視するのは最も年齢が若く (6.61)、次いで公助を重視 (7.12)、自助を重視が 7.6 と最も高い数値という結果であった。つまり互助・共助を重視する人たちは、比較的若い年齢層に多いと言える。そこで、次章からは、「互助・共助」を 1 位と回答した人、つまり「互助・共助」を重視している人はどのような人なのかを探索していくことにする。

V 支え合いを重視する市民像

1. 属性

前章の最後に示した「互助・共助」を重視すると回答した人を、「地域の支え合いを重視する人」と定義し、そのイメージについて第二章で触れた属性等の項目を変数とし、2 項ロジスティック回帰分析を行い、関連性のある項目を浮き上がらせていく。なおオッズ比については、粗オッズ比とした。いずれも有意確率としては 0.00 である。また、Hosmer-Lemeshow の検定による有意確率は、いずれも $P > 0.05$ であり、ロジスティック回帰モデルは適合していると判断した。

表 17 支え合いを重視する人の属性 (ロジスティック回帰分析)

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	EXP(B) の 95% 信頼区間		
						Exp(B)	下限	上限
年齢	-0.112	0.031	12.933	1	0.000	0.894	0.842	0.951
女性 (対男性)	-0.067	0.163	0.169	1	0.681	0.935	0.68	1.286
居住区			9.462	6	0.149			
門司区								
小倉北区	0.536	0.302	3.162	1	0.075	1.71	0.947	3.088
小倉南区	0.206	0.302	0.464	1	0.496	1.229	0.679	2.222
若松区	0.504	0.333	2.292	1	0.130	1.655	0.862	3.179
八幡東区	0.612	0.342	3.207	1	0.073	1.843	0.944	3.6
八幡西区	0.079	0.295	0.072	1	0.789	1.082	0.607	1.931
戸畑区	0.067	0.425	0.025	1	0.875	1.069	0.465	2.459
住居			3.137	3	0.371			
一戸建て								
アパートやマンションなどの共同住宅	-0.27	0.171	2.483	1	0.115	0.763	0.546	1.068
勤め先の寮や借り上げ住宅	0.135	0.432	0.097	1	0.755	1.144	0.491	2.668
入所施設やグループホームなど見守りや介護が提供されている場所	-18.84	10850.213	0	1	0.999	0	0	
居住年数	-0.047	0.095	0.243	1	0.622	0.954	0.793	1.149
家族構成	-0.115	0.068	2.865	1	0.091	0.891	0.78	1.018
就労状態			10.362	7	0.169			
下記のいずれにも該当しない								
フルタイム (主として日中に勤務)	-0.53	0.244	4.709	1	0.030	0.588	0.365	0.95
フルタイム (主として夜間に勤務、あるいは交代制勤務がある)	-0.93	0.399	5.415	1	0.020	0.395	0.18	0.864
短時間勤務 (パート、アルバイト、臨時雇用など)	-0.398	0.278	2.054	1	0.152	0.671	0.389	1.158
自営業	-0.474	0.359	1.748	1	0.186	0.622	0.308	1.257
学生 (学業が本分の場合、アルバイトをしていてもこちらに該当)	-0.323	0.459	0.495	1	0.482	0.724	0.295	1.779
家事 (介護や未就学児の育児を伴う)	-0.892	0.514	3.012	1	0.083	0.41	0.15	1.122
家事 (介護や未就学児の育児を伴わない)	-0.689	0.33	4.362	1	0.037	0.502	0.263	0.958
定数	-0.866	0.55	2.478	1	0.115	0.42		

地域の支え合いを重視する人について、年齢や性別等の属性との関係について見ていく。表 17 のように、年齢と就労状態において有意な関連性が見られた。年齢については年齢階級（表 16 参照）が 1 つ上がるたびに該当する確率が下がる。また「フルタイム(主として日中に勤務)」、「フルタイム(主として夜間に勤務、あるいは交代勤務がある)」、「家事(介護や未就学児の育児を伴わない)」といった項目に該当した場合は、いずれの就労状態にも該当しない場合よりも支え合いを重視する人に該当する確率が下がるほうへ影響を与えることがわかった。以上から、支え合いを重視する人の属性は年齢が若く、フルタイムで働いておらず、介護や育児をしていない人である。

2. 近所との交流・支え合いの実感や考え

表 18 支え合いを重視する人の近所との交流・支え合いの実感や考え
(ロジスティック回帰分析)

		B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	EXP(B) の 95% 信頼区間		
							Exp(B)	下限	上限
近所との交流	あいさつを交わす	-0.968	0.267	13.157	1	0	0.38	0.225	0.641
	立ち話をする	-0.249	0.197	1.59	1	0.207	0.78	0.53	1.148
	一緒にお茶や食事をする	0.154	0.3	0.262	1	0.608	1.166	0.648	2.098
	物をあげたりもらったりする	0.149	0.203	0.539	1	0.463	1.161	0.78	1.727
	趣味をともにする	-0.103	0.365	0.08	1	0.777	0.902	0.441	1.846
	相談事があったとき、相談したり、相談されたりする	0.001	0.275	0	1	0.997	1.001	0.584	1.716
	家事やちょっとした用事をしたり、してもらったりする	0.506	0.341	2.201	1	0.138	1.658	0.85	3.233
	病気や急用のときに手伝ったり、手伝ったりしてもらったりする	-0.42	0.378	1.234	1	0.267	0.657	0.313	1.379
	普段の人との会話・世間話			1.673	5	0.892			
	ほとんど話をしない								
	毎日	0.202	0.35	0.332	1	0.564	1.224	0.616	2.431
	2～3日に1回	0.286	0.396	0.521	1	0.47	1.331	0.612	2.893
	4～7日に1回	0.342	0.418	0.67	1	0.413	1.408	0.621	3.191
	2週間に1回	0.586	0.523	1.252	1	0.263	1.796	0.644	5.01
	1か月に1回	0.367	0.518	0.502	1	0.479	1.443	0.523	3.979
近所の支え合いの実感	感じない			5.532	3	0.137			
	感じる	0.163	0.328	0.246	1	0.62	1.177	0.618	2.239
	どちらかといえば感じる	-0.026	0.261	0.01	1	0.922	0.975	0.584	1.627
	どちらかといえば感じない	0.389	0.239	2.634	1	0.105	1.475	0.922	2.359
地域の支え合いへの考え	地域における支え合いは必要であり、今後も充実させるべきだと思う			18.779	3	0			
	現在の自分には必要ないが、大切なことだと思う	-0.534	0.177	9.138	1	0.003	0.586	0.415	0.829
	行政が対応できない課題はボランティアやNPOに任せたい方がよいと思う	-0.381	0.477	0.639	1	0.424	0.683	0.268	1.739
	地域の支え合いに頼らずに、公的な福祉サービスで対応すべきと思う。	-2.407	0.692	12.114	1	0.001	0.09	0.023	0.349
	定数	-1.531	0.413	13.758	1	0	0.216		

次に近所との交流や支え合いの実感、考え方との関係について見ていく。その結果、地域との交流、普段の人との会話・世間話、近所の支え合いの実感のいずれにおいても関連性が見られなかった（表 18）。地域の支え合いの考え方については、「現在の自分には必要ないが、大切なことだと思う」と「地域の支え合いに頼らずに、公的な福祉サービスで対応すべきだと思う」と考えている人は、地域の支え合いを最も重視していないと言える。

3. 健康状態

健康状態との関連性では、健康状態が「あまりよくない」人は地域の支えあいを重視していない。一方で「最近1ヶ月間に物事に対して興味がわかない、あるいはここから楽しめない感じがよくあった」状態にあった人は地域の支え合いを重視していることがわかった（表 19）。

表 19 支え合いを重視する人の健康状態（ロジスティック回帰分析）

		B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp(B)	EXP(B) の 95% 信頼区間	
								下限	上限
健康状態	よい	-0.023	0.486	0.002	1	0.963	0.978	0.377	2.533
	まあよい	-0.67	0.489	1.875	1	0.171	0.512	0.196	1.335
	ふつう	-0.774	0.47	2.708	1	0.100	0.461	0.183	1.159
	あまりよくない	-1.882	0.528	12.714	1	0.000	0.152	0.054	0.429
	よくない			34.437	4	0.000			
過去6か月以上にわたって、周りの人が通常おこなっているような活動について、あなた自身の健康上の問題による制限があったか	非常に制限があった	-0.367	0.478	0.588	1	0.443	0.693	0.271	1.769
	制限はあったがひどくはない、あなた自身の健康上の問題による制限があったか	0.194	0.222	0.758	1	0.384	1.214	0.785	1.877
	まったく制限はなかったか			1.742	2	0.418			
最近1か月間に気分の落ち込みや憂鬱な気持ちになることがあった		-0.194	0.242	0.644	1	0.422	0.824	0.513	1.323
最近1か月間に物事に対して興味がわかない、あるいはここから楽しめない感じがよくあった		0.488	0.239	4.191	1	0.041	1.63	1.021	2.602
生活困難時に相談できる行政窓口がある		-0.272	0.153	3.143	1	0.076	0.762	0.565	1.029
長生きすることは良いことだと思うか	とてもそう思う	0.115	0.353	0.107	1	0.744	1.122	0.562	2.242
	ややそう思う	0.205	0.332	0.382	1	0.537	1.228	0.64	2.355
	あまりそう思わない	0.162	0.335	0.234	1	0.628	1.176	0.61	2.266
	全くそう思わない			0.491	3	0.921			
定数		-1.893	0.563	11.301	1	0.001	0.151		

4. 地域活動が活性化するのに特に大切なこと

前章までで取り上げていなかった変数であるが、「どうすれば地域活動が活性化すると

「思うか」という質問の回答を説明変数として、ロジスティック回帰分析を行った。その結果が表 20 である。

表 20 支え合いを重視する人が考える地域活動活性化のために大切だと思うこと

地域活動が活性化するのに 特に大切だと思うこと	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	EXP(B) の 95% 信頼区間		
						Exp(B)	下限	上限
その他	0.75	0.367	4.167	1	0.041	2.116	1.03	4.346
地域の課題と、解決の手助けとなるボランティアや活動団体をつなぐ支援	0.573	0.166	11.923	1	0.001	1.774	1.281	2.455
地域活動の社会的評価を高めるための表彰制度などをつくる	0.547	0.318	2.968	1	0.085	1.729	0.927	3.222
自治会や町内会などの地縁団体の活性化	0.521	0.158	10.898	1	0.001	1.684	1.236	2.296
地域活動の意義を普及するためのイベントなどを実施する	0.488	0.17	8.276	1	0.004	1.629	1.168	2.271
企業の地域貢献活動	0.351	0.203	2.986	1	0.084	1.421	0.954	2.115
地域活動に関する情報が入手しやすい仕組みを充実する	0.313	0.15	4.346	1	0.037	1.368	1.019	1.837
目的や組織、運営が異なる地縁団体や活動団体の協働	0.312	0.247	1.598	1	0.206	1.366	0.842	2.216
祭りやイベントへの参加者から地域活動の担い手の掘り起こしを図る	0.161	0.169	0.903	1	0.342	1.174	0.843	1.635
地域の住民での地域の課題や解決策の話し合い	0.152	0.195	0.611	1	0.434	1.165	0.795	1.707
社会福祉協議会の地域への積極的な支援	0.15	0.205	0.532	1	0.466	1.161	0.777	1.735
子どもの頃から地域活動を行う精神を育むための教育を充実する	0.087	0.15	0.338	1	0.561	1.091	0.813	1.464
地域の住民への啓発活動	0.078	0.191	0.167	1	0.683	1.081	0.743	1.572
専門家による地域へのアドバイス	0.047	0.201	0.055	1	0.815	1.048	0.706	1.556
興味・関心のある地域活動を自由に体験できる仕組みをつくる	-0.043	0.152	0.081	1	0.776	0.957	0.71	1.291
世代間の積極的な交流	-0.101	0.17	0.355	1	0.551	0.904	0.648	1.26
福祉事業者の地域貢献活動	-0.147	0.262	0.314	1	0.575	0.864	0.517	1.443
行政による地域への積極的な支援	-0.215	0.164	1.726	1	0.189	0.807	0.585	1.111
地域で活動を行うための金銭的な支援	-0.218	0.201	1.183	1	0.277	0.804	0.542	1.191
地域活動へ還元するための募金活動	-1.766	0.843	4.387	1	0.036	0.171	0.033	0.893
定数	-3.061	0.205	223.468	1	0	0.047		

プラスの関係性では「地域の課題と、解決の手助けとなるボランティアや活動団体をつなぐ支援」、「自治会や町内会などの地縁団体の活性化」、「地域活動の意義を普及するためのイベントなどを実施する」、「地域活動に関する情報が入手しやすい仕組みを充実する」

といった取り組みが大切であると考えていることがわかった。一方でマイナスの関係性では「地域活動へ還元するための募金活動」が大切であると思う人は地域での支え合いよりも自助や公助を重視していることがわかった。

5. 活動への支障

第3章でも取り上げたボランティアの支障となると思うことについても、同様に分析を行った。その結果が表21である。

表21 支え合いを重視する人が考えるボランティアの支障になること

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	EXP(B) の 95% 信頼区間		
						Exp(B)	下限	上限
始めるときに支障								
家族環境（結婚、出産、介護など）	0.399	0.177	5.099	1	0.024	1.491	1.054	2.108
情報を入手したり交換したりする機会がない	0.203	0.194	1.094	1	0.296	1.225	0.838	1.791
時間的な余裕がない	0.162	0.167	0.934	1	0.334	1.175	0.847	1.632
活動のために資格や研修が必要となる	0.102	0.195	0.274	1	0.601	1.107	0.756	1.623
一緒に活動する仲間がいない	0.046	0.182	0.064	1	0.8	1.047	0.733	1.497
人付き合いが苦手、またはわずらわしい	0.046	0.189	0.058	1	0.809	1.047	0.723	1.516
興味・関心がもてない	-0.029	0.191	0.023	1	0.88	0.972	0.668	1.414
健康や体力面で余裕がない	-0.058	0.164	0.127	1	0.722	0.943	0.684	1.3
経済的な余裕がない	-0.436	0.184	5.619	1	0.018	0.646	0.451	0.927
ボランティア活動中のトラブル	-0.642	0.266	5.822	1	0.016	0.526	0.312	0.886
続けることの支障								
経済的な余裕がない	0.274	0.194	1.997	1	0.158	1.315	0.899	1.923
ボランティア活動中のトラブル	0.164	0.206	0.632	1	0.427	1.178	0.787	1.762
時間的な余裕がない	0.127	0.187	0.463	1	0.496	1.135	0.788	1.636
一緒に活動する仲間がいない	0.055	0.218	0.063	1	0.802	1.056	0.689	1.62
家族環境（結婚、出産、介護など）	-0.022	0.184	0.014	1	0.906	0.978	0.682	1.404
興味・関心がもてない	-0.065	0.225	0.083	1	0.773	0.937	0.603	1.456
活動のために資格や研修が必要となる	-0.121	0.26	0.217	1	0.641	0.886	0.533	1.474
健康や体力面で余裕がない	-0.265	0.178	2.202	1	0.138	0.768	0.541	1.089
情報を入手したり交換したりする機会がない	-0.299	0.285	1.097	1	0.295	0.742	0.424	1.297
人付き合いが苦手、またはわずらわしい	-0.474	0.221	4.607	1	0.032	0.622	0.403	0.96
定数	-2.521	0.153	271.054	1	0	0.08		

プラスの関係性としては、始めるときに「家族環境（結婚、出産、介護など）」が支障となると思っていることがわかった。マイナスの関係性としては始めるときに「経済的な余裕がない」、「ボランティア活動中のトラブル」、そして続けることでは「人付き合いが苦手、またはわずらわしい」の3つの項目については思っていないということがわかった。

以上がロジスティック回帰分析の結果を踏まえた、地域の支え合いを重視する人と関連性のある内容である。

6. 支え合いを重視する市民像

ここまでの結果を踏まえて、地域の支え合いを重視する人はどのような人物なのかを整理していきたい。ここではこれを「市民像」と表現することにする。分析結果から見えてきた関連性のある項目は次のとおりである。

- ① 平均年齢は若めである。
- ② フルタイムでは就労しておらず、介護や育児をしているというわけでもない。
- ③ 地域の支え合いについては、現在の自分には必要であると考えており、公的なサービスで対応すべきだとは思っていない。
- ④ 健康状態が悪いわけではない。（健康状態は良い方）
- ⑤ 最近1ヶ月間に物事に対して興味がわからない、あるいはころから楽しめない感じがよくあったという経験をしている。
- ⑥ 地域活動の活性化のためには「地域の課題と、解決の手助けとなるボランティアや活動団体をつなぐ支援」、「自治会や町内会などの地縁団体の活性化」、「地域活動の意義を普及するためのイベントなどを実施する」、「地域活動に関する情報が入手しやすい仕組みを充実する」といった取り組みが大切だと思っている。しかし募金活動については大切だとは思っていない。
- ⑦ ボランティアを始めるときは「家族環境（結婚、出産、介護など）」が支障となると思っている。しかし始めるときに「経済的な余裕がない」、「ボランティア活動中のトラブル」、そして続けることでは「人付き合いが苦手、またはわずらわしい」といったことは、活動を続ける上で支障にならないと思っている。

以上のような地域での支え合い・助け合いを重視する市民像が浮き上がってきたわけであるが、この浮き上がってきた市民像は果たして、地域福祉の担い手として期待できるのだろうか。その点については、さらなる分析が必要である。

北九州市の「(仮称)北九州市の地域福祉2021～2025」の素案にも書かれているように、地域福祉の担い手を育てていくという事は非常に重要なことである。中心的な担い手となるだろう地域の支え合いを重視する人の市民像については、上記の①から⑦のとおりである。彼らが積極的に地域福祉活動に参加し、北九州市の地域活動をより充実したものにし

ていく取り組みが必要であろう。一方で自助や公助を重視する人たちに対しては、地域での支え合いを重視する人たちと同様に、地域活動に取り組んでもらえるような働きかけも重要であろう。その際にモデルとなるような市民像を示したり、あるいはボランティアの育成の取り組みの方向性は、地域での支え合いを重視する市民像から考えることは1つのヒントになると考えられる。

VI おわりに

本論では、地域での支え合いを重視する人たちが福祉に関わる、さらに言うならば生活困窮者などの少数派でかつ社会的に脆弱な社会的に排除された状態にある人たちの福祉問題に対して関心を持ち、その解決に向けた取り組みを行うかどうかということに関してはふれていない。そこに必要（ニーズ）と提供（ボランティア）のミスマッチがあるとするならば、地域共生社会の実現と言う理念を目指すことは難しくなる。地域での支え合いをイベントや楽しいこと、あるいは日常の簡単な支え合いを想定していたとすると、生活困窮者などの福祉問題を、地域を基盤として解決していく取り組みを進めることは難しい。社会福祉法にも規定された地域生活課題を解決するための支援の必要と、地域での支え合いに取り組みたいというボランティア（市民参加）の「やりたいこと」が一致しているのかどうかを明らかにすることが、本論に残された研究課題である。この残された研究課題については改めて別の機会とし、多変量解析の一つであるコレスポネンシ分析を用いて、「ボランティアのミスマッチ」は起きていないのかを明らかにさせていただきたい。

（本学 基盤教育センター 准教授）

〔注〕

- 1) 北九州市ウェブサイト「北九州市地域福祉計画策定懇話会（令和 2 年度）」（<https://www.city.kitakyushu.lg.jp/ho-huku/16500271.html>）、2021 年 1 月 31 日閲覧）。
- 2) 二木（2017）は、「我が事、丸ごと」については、当時の厚生労働大臣が好んで使用した言葉であり、大臣交代後は「死語化」と指摘している。その後の動向を見ても、この指摘は政策としては妥当である。しかし、地方の地域福祉行政においては、まだまだ「生きている言葉」として感じることもある。
- 3) 抽出にあたっては、住民基本台帳から母集団を抽出してから、年齢層と性別の比率に基づいて無作為に行われた。

〔参考文献〕

岩崎晋也・岩間伸之・原田正樹編（2014）『社会福祉研究のフロンティア』有斐閣。
岩間伸之・野村恭代・山田英孝・切通堅太郎（2019）『地域を基盤としたソーシャルワーク

- 住民主体の総合相談の展開』中央法規出版。
- 上野谷加代子編著（2020）『共生社会創造におけるソーシャルワークの役割 地域福祉実践の挑戦』ミネルヴァ書房。
- 岡村重夫（2009・1974）『地域福祉論 新装版』光生館。
- 草平武志（2007）「福祉コミュニティ」『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規、P.1130～P.1133。
- 後藤康文（2019）「『地域共生社会』と地域福祉 —その1 『地域共生社会』政策の登場経緯—」『岐阜協立大学論集』53巻2号、P.49～P.67。
- 新川達郎（2019）『地域福祉政策論』学文社。
- 隅田好美・藤井博志・黒田研二編著（2018）『よくわかる地域包括ケア』ミネルヴァ書房。
- 高林秀明（2004）『健康・生活問題と地域福祉 暮らしの場の共通課題を求めて』本の泉社。
- 東洋大学福祉社会開発研究センター編（2011）『地域におけるつながり・見守りのかたち福祉社会の形成に向けて』中央法規出版。
- 二木立（2017）『地域包括ケアと福祉改革』勁草書房。
- 林博幸・安井喜行編著（2006）『社会福祉の基礎理論 改訂版』ミネルヴァ書房。
- 平野隆之（2020）『地域福祉マネジメント ——地域福祉と包括的支援体制』有斐閣。
- 牧里每治（1993）「地域福祉研究」『現代福祉学レキシコン』雄山閣、P.504～P.505。
- 牧里每治・杉岡直人・森本佳樹編著（2013）『ビギナーズ地域福祉』有斐閣。
- 三塚武男（1997）『生活問題と地域福祉 ライフの視点から』ミネルヴァ書房。

STUDIES
OF
INSTITUTE FOR
REGIONAL STRATEGY

CONTENTS

Image of citizens who think it is important to support and help each other
Secondary analysis of the City of Kitakyushu's "Citizen's Attitude Survey
on Community Welfare" Takeharu SAKAMOTO 47

No. 6
March 2021
INSTITUTE FOR REGIONAL STRATEGY
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
KITAKYUSHU CITY, JAPAN